

8) カラマツ=唐松/落葉松

カラマツはマツ科の落葉高木で、日本の特産種である。しかし北関東の日光、尾瀬、中部山岳地帯や富士山など、一部に自生林があるものの、ほとんどは植林されたものである。樹皮は暗褐色で黒松のように大きな鱗状にはならず、幹は直立し高さ 30m に達する。樹形はほぼ円錐形となり、葉は赤松や黒松よりは短く長さ 3~4cm 幅 1mm の線形で、秋にはよく黄葉する。雌雄同株で 5 月頃に短枝の先に一つずつ単性花を開く。雌花は楕円形をした美しい紅紫色で、雄花は球形で淡黄色である。和名の起りは唐絵に出てくるマツに、葉の出方が似ているために唐松と付けられたもので、落葉するところから落葉松の文字を当てることもある。別称としてはニッコウマツ、フジマツなどの地名で呼ばれたり、オズバマツ、エンコマツなどとも呼ばれている。学名は『*Larix kaempferi*』で、属名はヨーロッパカラマツの古名による。種小辞は植物学者「ケンペルの」という意味である。

カラマツは成長が早く、水田や畑に向かないような荒地でもよく育ったから、かつては中部地方から北の各地で植林され、戦時中には土木建築用材、枕木、杭木として用いられた。しかし脂が多く出ると、若い樹齢の材は乾燥する過程で捻じれが出るために狂いが生じやすく、建築用材としてはあまり用いられなくなり、今ではパルプ用材としてかろうじて面目を保っている。ところが最近では薬品処理することで、捻じれを押さえる事ができるようになり、ログハウスの急速な人気化もあって、再び建築用材として脚光を浴びるようになった。長野県佐久市では『種畜場』の周辺に、大きな落葉松並木と白樺並木があり、西欧的な一画を作り出している。ちょうど八ヶ岳、蓼科山と浅間山にはさまれた平坦地で、春の新緑の頃はひととき美しい。種畜場内には樹齢 100 年を超える桜もあり、連休の頃に満開となる。

落葉松が文学に登場するのは明治になってからのことで、北原白秋の『水墨集』には落葉松の詩が収められており、この詩は特に有名である。

落葉松

からまつの林を過ぎて
からまつをしみじみと見き。
からまつはさびしかりけり。
たびゆくはさびしかりけり。

からまつの林を出でて、
からまつの林に入りぬ。
からまつの林に入りて、

また細く道はつづけり。

からまつの林の奥も
わが通る道はありけり。
霧雨のかかる道なり。
山風のかよう道なり。

からまつの林の道は
われのみか、ひともかよひぬ。
ほそぼそと通ふ道なり。
さびさびといそぐ道なり。

からまつの林を過ぎて
ゆゑしらず歩みひそめつ。
からまつはさびしかりけり、
からまつとささやきにけり。

からまつの林を出でて、
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
からまつのまたそのうへに。

からまつの林の雨は
さびしけどいよよしづけし。
かんこ鳥鳴けるのみなる。
からまつの濡るるのみなる。

世の中よ、あはれなりけり。
常なれどうれしかりけり。
山川に山川の音、
からまつにからまつのかぜ

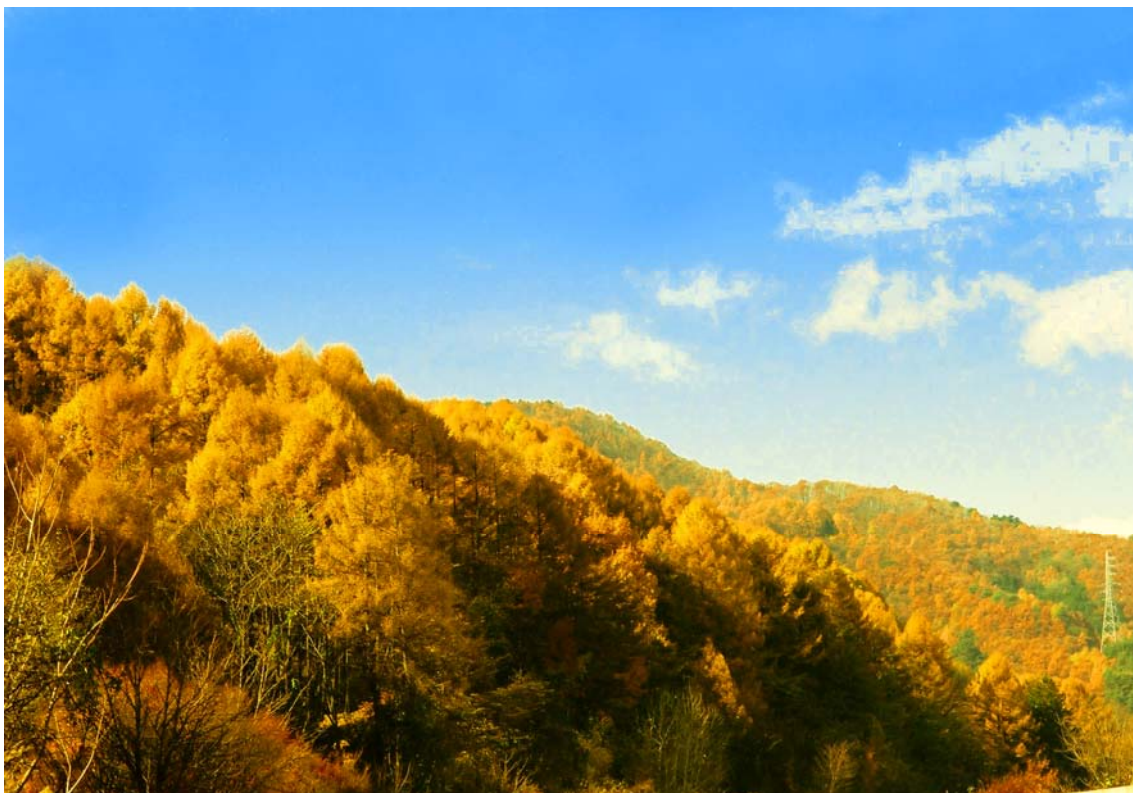
白秋が見た落葉松林は、軽井沢周辺の、例えば信濃追分あたりの風景であろう。堀辰雄が活躍したのもこの辺りで、中仙道と北国街道の分岐点にあたり、昔は善光寺参りの宿場でもあった。今でも当時の名残りが偲ばれる田園風景が広がっている。



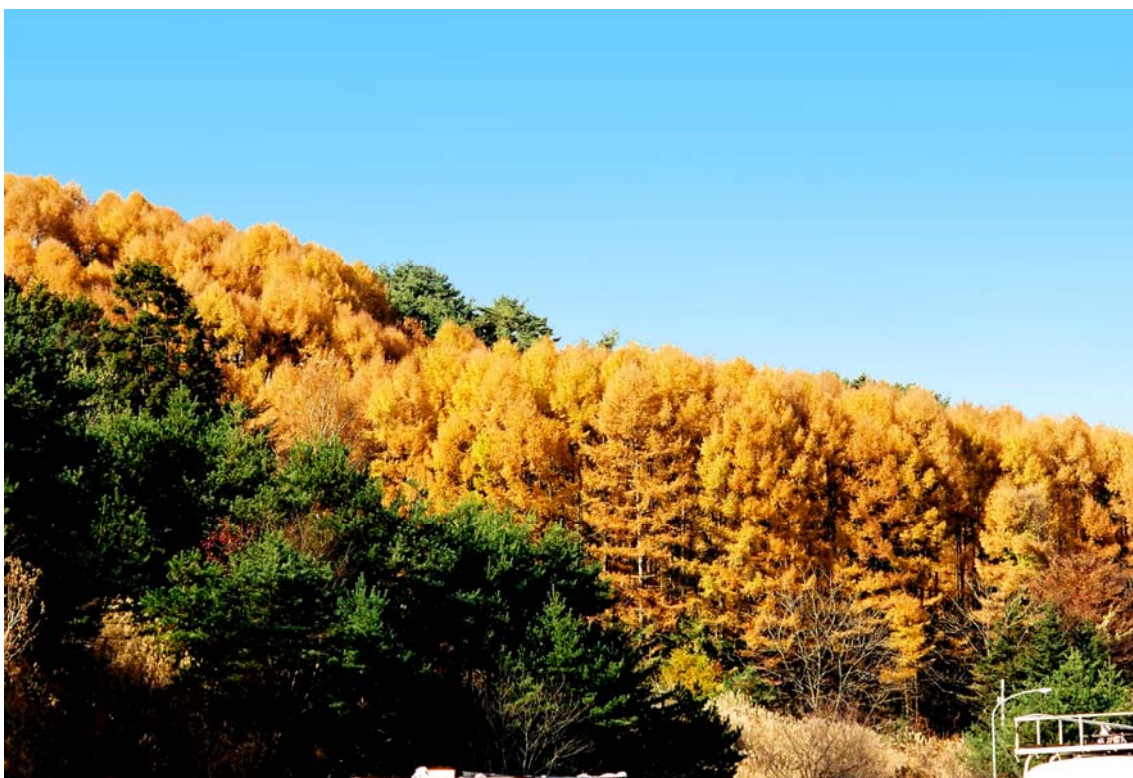
長野牧場(旧種蓄場)のカラマツ林、後方の連山は菅平方面。唐松の中央後方には浅間山があるのだが、ちょうど木で隠れている。長野牧場には唐松と白樺が多い(長野県佐久市)。



長野牧場(旧種蓄場)のカラマツ並木(長野県佐久市)。



すっかり黄色に染まったカラマツ。美しい景色ではあるが、唐松は材としての利用価値がいまひとつなのと、人手不足とコスト高で切り出しも出来ない(長野県諏訪湖付近)。



黄葉したカラマツ(群馬県上野村)。この付近はもう長野との県境に近い。

[目次に戻る](#)